

巻 頭 言

毛谷村 英 治
立教大学 観光学部 学部長

本年 2016 年、南米大陸初の夏季オリンピックがリオ・デ・ジャネイロで開催されます。アジア初の開催地は 1964 年の東京でしたが、この開催をきっかけに日本人の海外渡航が自由化されました。その後の 50 有余年の間に日本人の旅行形態は大きく変化してきました。

観光学はその黎明期に観光を前向きに捉え、推し進める方向で研究が進められました。そして、観光が観光地やその住人、観光者、社会に及ぼす影響や効果などについての研究が深まり、近年は、観光を文化的な事象として扱う研究とともに、観光をめぐる社会関係を対象とした研究や観光地経営に関する研究まで研究分野は大きく広がっています。

観光が引き起こす様々な影響や効果などを研究対象として取り扱ってきた立教大学観光学部の教員や研究者にとっては、近年増加してきている外国人旅行者の受け入れについて表層的な問題点を例示するだけでなく、これまで取り組んできた研究から得られた知見に基づきその本質的な課題や問題点などについて示すことができ、研究の成果を実社会に還元できる時代がやってきたと捉えることができそうです。

観光を巡るこうした社会状況の変化の中で研究や実務に取り組んでこられた稲垣勉教授と玉井和博特任教授が 2016 年 3 月に退職されます。両先生が築き上げてこられた業績は計り知れず、観光研究に携わる者にとって両先生は観光学やホテルについての生き字引のような存在でした。

玉井先生は、長年のホテル経営の実務から得られた知見を元にホテルの経営・運営・管理、そして、投資について最新の事例を用いた教育と研究指導にご尽力下さいました。

稲垣先生は、観光事象を社会学的見地から現象として捉えるだけでなく、最新の経営学の視点を取り入れ、さらには、そこに生じる文化的軋轢や影響、社会関係に至るまでをカルチュラルスタディーズの対象として研究してこられました。研究者や実務家に向けての厳しくも詳しく分かり易い指導は定評がありました。観光を文化的事象としてのみ捉えるのではなく、価値観の相違を内包した消費行動、あるいは経済活動として捉えて解明に取り組んでこられた姿勢はまさに観光学の研究者としてあるべき姿なのではないかと思われまます。

観光学の研究が観光の変容を単に現象として捉えることにとどまらず、その社会的背景や影響の広がりについて解明し、社会活動の一側面として観光を捉え、社会を紐解く研究としてこれからも発展していくことを願ってやみません。

観光学部を導いてくださったお二人の先生に改めて深く感謝致します。